

表紙のことは

写真と文：鈴木正美

「人生って分かりませんね」

そう話すと、白濱和郎さんと妻の一美さんは「そうですねえ！」と声



をそろえてうなずいた。

青空が澄み渡って、キラキラした光が心地よい。サラリーマンの家庭に育った和郎さんはもともと鉄鋼関係のエンジニア。一人娘の一美さんとの結婚を機に白濱家へ入る。

初め、全く知識のなかった和郎さんに義父・幸一さんは自分でデコポンを栽培できる圃場^{ほじょう}を与えた。和郎さんは、

「初めてのデコ、それがですね……すごくよく採れたんです！」

それをきっかけにますます栽培にのめり込んだ。

遠くに海が見える絶景の圃場。美しい風景。茂る木々の間から幸一さんが現れた。

「昔は急勾配の畑で栽培していたんですが、少しずつ施設を整え、より栽培しやすい圃場に切り替えてきた



んです。設備投資をするとその分可能性も広がるんです。農業は天気など何が起こるか分からない。だからこそ、備えが大切です」

そんな幸一さんの堅実さが現在の経営を盤石なものにしているのだ。

2人に並んでもらい、シャッターを切った。幸一さんの築き上げたものを和郎さんがしっかり継承し、さらに新しい農業を営んでいくに違いない。義父を見る和郎さんの澄んだ瞳に可能性を感じて胸が熱くなった。

JAグループ
共通コンテンツ

食・農・地域のくらしを支えるJAの存在意義や取り組みを紹介するJAグループ共通コンテンツ（JA新聞連『JA広報通信』にて提供中）。今年度は、「変わるJA 広がる地域のきずな」をテーマに毎月Q & A方式で解説します。JA広報誌への掲載等により、組合員や地域住民への情報提供資料として、ぜひご活用ください。

変わるJA 広がる地域のきずな

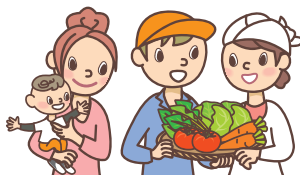
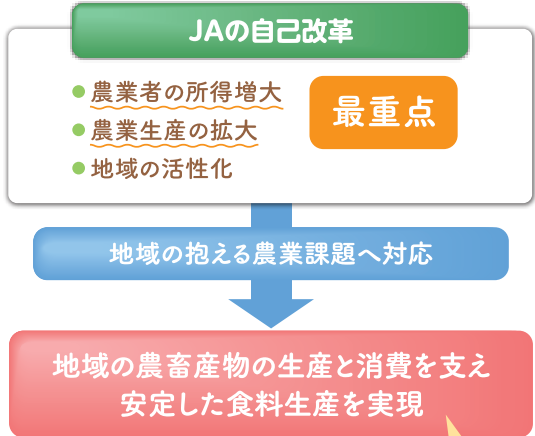
監修=広島大学
助教 小林元

Q、JAの自己改革は地域社会とどんな関わりがあるの？

A、地域の生産と消費を後押しして、食料の生産基盤を支えます。

JAの自己改革では、「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」を目指しています。農業者の平均年齢は66.7歳(2017年)となり、国内の農業就業人口が年間10万人規模で減少する中、農業の担い手の確保が難しくなっています。また、食料自給率は主要先進国で最も低い38%(2017年度、カロリーベース)まで落ち込みました。JAは自己改革を通じて、生産コストの引き下げや有利販売の拡大、次世代の担い手の育成、地域の活性化などにより、地域の農畜産物の生産と消費を支えていきます。日本の食料の生産基盤を守る上でも、大切な取り組みです。

近年は、各地で豪雪や豪雨、地震などの災害が相次ぎ、農業現場も大きな被害を受けました。JAは、災害発生時においても、被害状況の調査や生産資材の確保、農地、農業施設の復旧など、被災地の一刻も早い再生に向けた支援を行っています。いかなる時でも地域の食料生産を守り、発展させていくために、これからもJAグループで力を合わせて自己改革を進めていきます。



災害など有事の際には…

- 被害状況の速やかな把握
- 生産資材の確保
- 農地・農業施設の復旧

などをサポート

耕そう、大地と地域の未来。